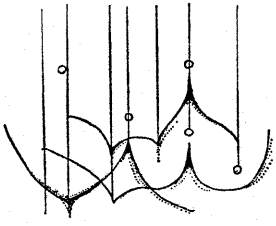
アメリカの若者の経験

——現代世界の一断面——

足立寿美



「コモン・センス、それで判断すればいいんじゃない？」

あら？　私は突然きき耳を立てた。夜の高速道路でバッテリーを切らして動かなくなった私の車を車庫まで運んでもらうトーリング・トラックの中である。そうっと隣の若者に視線を合わせたトタン、小降りになった雨の打つ窓にいなびかりがノコギリの歯型を描く。と、パシフィック・オーションの水平線がぐっと盛り上って、それを背景にした黒い巻毛の涼しく整った青年の横顔が浮び上る。

「夜だからサ、外の車にエンコ車の存在を知らせるためにライトを残す、四つ角だから坂を登ってくる車が見通せるようにたっぷりと視界を残す。なんてことないよ。コモン・センスを使うことサ。ね、気がついた？　パトロール・カー。あれで我々の到着が一・二秒遅れていたらこの二点で二・三万近い罰金取られたんじゃない？」

私の車はこの坂道を登り切る直前で完全にストップした。私のコモン・センスもここらあたりで完全に停止した。

「僕はね、現代のアメリカ社会がこんなに住みにくくなりつつある一つの理由はコモン・センスの使用を拒否す

る人間が増えたからだと思うよ。それに、学校教育にだって、こいつを育てる場がないじゃない？」

並の人間が眠る時刻に、トラックの運転をして生活を営む若者は、講演会のマイクロフォンを前に据えて沢山の聴衆にきかせたいようなことを口にした。音質の高いカー・ステレオから十二才になる娘がごく最近ききはじめたステーションのポピュラー・ミュージィクが流れる。

夜の仕事で身についた習いであろうか、暗闇の中で動かなくなった車の傍でトラックの到着を待って焦ら立つ人間を相手にすることから自然と備った技術であろうか、若者は話し好きであった。

「僕ね、去年七万五千マイル運転したんだよ。つまり約三十回にわたってアメリカ大陸を横断した計算になるんだけど無事故。車体にカスリ傷ひとつつけることすらしてない。今年はまだ三週間あるから去年の記録をちょっと上廻りそうだ。エッ？　秘訣？それはホラ、今前にラビットが走っているじゃない、こうやってハンドルを握りながらもしあの車が何らかの原因で事故を起こしたらと様々の状況を考えそれに応じたトラックのハンドル・ブレーキの扱い方を考える、もう習慣になってるね、そうするのが……」

過去三年こんな風に土曜日を除く毎日、夕方六時から朝六時まで働くというのでさぞ大変な苦労と勝手にきめ込んで同情すると、

「好きでやってるんだよ。運転するのが大好きなんだよ。この仕事をしていりゃまあ存分にハンドル握っていられるじゃない。それに夜中ならスピードも出せるしね。収入？　そりゃ並の人間のやりたがらない時間に働くからいいよ。月千五百ドル越えるかな。でも、金だけが目あてじゃちょっと長続き無理なんじゃない？」

青年の車運転好きは、八才の時、父親から〝やってみるかい？〟と云われて自力で運転した経験にはじまったそうである。幼い車気狂いの男の子には、グイグイとギア・シフトをしていく右手の動き、それとリズムを合わせてクラッチを踏む足、じっとしているかと思うと急にずらしてブレーキを踏む右足、こうした父親の手足の動

きを眺め続けた時間がかなりあったことだろう。それに続いて両親の真似をして隣で呼吸を合わせて両手両足を動かす、そんな遊びの期間もあったことだろう。若い父親はそうした我が子の足がペダルに届くやいなややってみるかいと自分の座にすわらせた。大きくなれば何時か僕もと憧れの眼で眺め続けた『お父さんの座』に収ったその瞬間の感激と誇りは想像に難しくない。「いいかい？　大きくならなければ車を運転出来ないといった所で、これは簡単なんだよ。車の動かし方はちゃんと一定のルールがあるんだよ。車は生き物じゃないから自分では動けない、だからガスを送ってやらなければね。そのためにペダルを踏む。それも一度にポンとひらいて沢山やったのでは、車輪が廻りすぎるから少しやる。それから車は重いだろう？　だから止っている時に人間の力だけでハンドルを切って車輪を右と左にと動かそうとすると大変な力がいる。でも一段動きはじめるとうんと少い力で済むんだよ。止める時は動かす時の反対で、足を踏んで送ったガソリンさえ使い切ってしまえば自然にストップする。何かの理由で例えば犬が前を横切るとか、誰か人がいる時はガソリンが燃え切るのを待っていたんでは間に会わないから車輪、動きを止めるためにブレーキを踏む。いいかいこんな風に目の前や後の情況に応じて手足を動かすにはね、常に準備をしておくんだよ。車って大きくって大人しか運転出来ないといったって簡単……。八才のコモン・センスで十分なんだよ。さあやってごらん」とでも云ったのであろう。

暗闇の中で隣からきこえてくる声でこんな情景を一人勝手にしたのは、『小さな事でも自力で解決を試みやり遂げるという経験が自信を生む。それが次にはもう少し程度の高いものへと挑戦してみようとの気力を育てる』との青年の見方と『自分の両親は知っている人間グループの中で一番コモン・センスがある』との批評からだった。ふと私の娘の姿を思い浮べる。その子は日本で育った母親の価値観と、アメリカ社会のそれとのひらきに気づき、最近はどちらかというとマミーはちょっとクレイジーと感じているような傾向があった。この子は大きく

なって彼女自身が親となる年令に達した頃、私のことをどんな風に描写することであろう……。

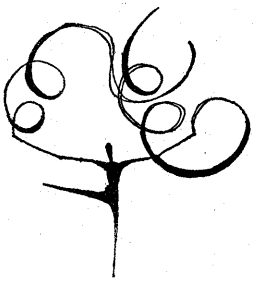
In childhood nothing is banal; inexperience means a capacity to be perpetually stimulated 〃幼年期、そこでは何年といえどもありふれた出来事ではありえない。無経験は絶え間なく始終刺戟される立場を意味するのだ〃。誰の云った言葉だったろうと思いつつ、日毎に新しい知恵知識を身につけていく幼年期に、ふとした父親の思いつき、〃力のシンボルのような車を自力で動かす〃経験がこの青年の魂づくりにつながった過程を思う。一つの幼児体験が人間形成へと一直線に結びつく。それはよく想い出ばなしにきくことであったし又伝記にもみられることなのだが思いがけない場所で思いがけない人の口々からきくことに、あらためてこの過程をみつめてみたい気持になった。そんな私にキモの入った若者はトラック運転手の生活振りをこと細かく説明してくれた。夜と昼、それが逆になったとはいうものの彼の生活は見事なまでに規則を知っている。六時の仕事終了と共に朝日の中を八マイル海辺に沿ってジョギング。禁酒、禁煙、八時間睡眠。食事はこうした職種の人間が好むファースト・フード、つまり健康自然食という。話がこのあたりまで進んだ頃にはアメリカの新世代の新しい人間像に行きあったのかとこの青年を取りまく友人達へと関心が湧いていた。つまりこの社会が大きく動いた一九七十年代からはずれたグループである。然しこの青年は友人よりも恋人の話をしたがった。

「ルネの為ならなんでもする覚悟。本当にいい奴。彼女、医学部志願なんだ。だから僕目下教育費貯めてんだよ。両親が出してやると話は纏っているんだけどサ。結婚したらこりゃ僕の責任じゃない、ね。この先の町に買った家現金払いしたもんで、何しろ銀行に十二パーセント、十三パーセントの利子払う馬鹿なことしたくないからサ、貯金減ったけどそれでもあるぜ。もしも僕の身の上に何か起きた場合は両親に恩返し出来なくなるからこの間六十万ドルの生命保険に入って迷惑をかけることがないように葬式の前払いもしたんだ」

この南カルフォニアは住宅が異常に高い。若い夫妻は共稼ぎしてくたびれ切ってアパートを長期担保で買うのが珍らしくない。そんな中で現金払い、然も葬式の手続きも支払いもしたときいて私はもうただ唖然とした。青年はルネとの育児計画を述べていく。

「子供は二人つくる。一人っ子というのはどうしてもかたわになるから。子供は子供同志でしか鍛え合えない部分があるからサ。教育方針は基本的には一本、つまり出来るだけ子供と一緒にいる時間を長くする。彼等が大きくなった時に両親がどこか傍に、必要な時にいつもいてくれたと思い出せればいいんじゃない。僕としては親の責任として小さなことを通じて自力で物事を処理する経験の場をつくってやる、これもコモン・センスだろうと？　簡単なことだよね」

簡単なことを私はなし得たであろうかと我が子を一人っ子にした私は、奥さんのルネがお医者様になった時御主人がトラックの運転手では困ることもあるのではとごく常識的質問をすると、その頃には弁護士になるための細かい時間計画と経済プランが立っていた。私はこの若き哲学者教育学者の顔をまじまじと眺め入った。

「僕の両親？　父は出版会社の販売責任者、母は家にいる。二人とも百パーセントイギリス人サ」と誇りたかく答えるアメリカ人の名前はジムといい、年令は二十一才になったばかりという。〝これがアメリカ……〟と一種の感銘にも似た感情に、連続的な稲妻と雷が折り重なり合った。

※足立寿美さんは、日本で児童のことを勉強した後、フルブライト留学生として米国と欧州に留学。アメリカ人のご主人が亡くなった後、チェコスロバキアの医師と結婚、現在カリフォルニア州サンディエゴ在住。アメリカとヨーロッパとにまたがって活躍しておられます。